英語イマージョンプログラムに興味・関心のある教員、
及び、市町村教育委員会の皆様対象

# 『オーセンティックな統合型テスト
# TOEFL Primary® Speakingを
# 団体実施する為に必要なハード・ソフト環境と授業デザインについて』


賢明学院小学校
英語科　反田　任
元同志社中学校・高等学校 英語科教諭
同志社大学文学部嘱託講師
Apple Distinguished Educator Class of 2015
Apple Professional Learning Specialist
Adobe Creative Educator Innovator 2025–2026

賢明学院小学校
英語科主任　中村　直紀
2025 文部科学省英語教育強化事業AI英語活用リーダー
元ECC外語学院近畿・関東管区長〈部長職〉
メタメトリックス社公認レクサイルエデュケーター
一般社団法人 国際教育英語試験協会公認
TOEFL Primary®/TOEFL Junior® アドバイザー
ECC AI英語アプリ活用アドバイザー




＜TOEFL Primary® Speaking Test受験の様子＞

GEET
一般社団法人
国際教育英語試験協会
Global Educational English Testing

# 目次


## Part１：オーセンティックな統合型テストTOEFL Primary® Speakingを団体実施する為に必要なハード・ソフト環境について(文責：反田　任)

**1. はじめに** …… **p.2**

**2. 団体実施に必要なハード・ネットワーク環境** …… **p.2**

（1）通信特性の理解 …… **p.2**

（2）通信安定性とその阻害要因 …… **p.3**

（3）Wi-Fi環境の設計 …… **p.3**

（4）廊下設置アクセスポイントの留意点 …… **p.4**

（5）座席配置と音声環境 …… **p.4**

（6）端末および機材 …… **p.4**

**3. 団体運営および教員のICTスキル** …… **p.4**

（1）試験監督の役割は「ICT運営者」である …… **p.4**

（2）教員に求められるICTスキルの実態 …… **p.5**

（3）試験前準備の質が結果を左右する …… **p.5**

（4）教室内の座席配置と人数 …… **p.5**

**4. 試験当日の運営と時間管理** …… **p.7**

**5. 試験中に求められる判断力** …… **p.7**

**6. 試験終了確認の重要性** …… **p.7**

**7. 教員研修の必要性** …… **p.8**

**8. まとめ** …… **p.8**

## Part２：オーセンティックな統合型テストTOEFL Primary® Speakingを団体実施する為に必要な授業デザインについて(文責：中村　直紀)

**1. はじめに** …… **p.9**

**2. 一条校としての実践** …… **p.9**

2.1 英語教育概要 …… **p.9**

2.2 その他のポイント …… **p.10**

2.3 授業デザイン …… **p.12**

2.4 評価 …… **p.12**

2.5 結果 …… **p.13**

**3. TOEFL Primary® Speaking Testについて** …… **p.15**

3.1 TOEFL Primary® Speaking Testフレーム …… **p.15**

3.2 TOEFL Primary® Speaking問題(例)― GC＆T公式HPより抜粋 …… **p.15**

3.3テスト結果の内容について …… **p.18**

3.4受験するタイミング～実施負担と費用面も含め考慮して～ …… **p.19**

**4. 最後に** …… **p.21**

# Part１：オーセンティックな統合型テストTOEFL Primary® Speakingを団体実施する為に必要なハード・ソフト環境について(文責：反田　任)

## 1. はじめに

近年、英語4技能の評価の重要性が高まる中、TOEFL Primary® / TOEFL Junior® Speakingのような CBT(Computer Based Testing)形式の試験を教育機関において団体実施する機会が増加している。

これらの試験は従来のペーパー試験や録音提出型の評価とは異なり、音声録音、時間制御、リアルタイム通信、クラウド保存といった複数の処理が同時に実行される高度なICT依存型試験である。そのため、適切な環境整備および運営体制が確保されていない場合、NS(No Score)と呼ばれる採点不能事例が発生するリスクがある。実際の運用においては、音声の歪み、録音欠損、背景ノイズ、通信不良、試験未完了などが原因となりNSが発生した事例が報告されている。

例えば、録音自体は行われているものの音声に大きな歪みが含まれている場合や、録音の一部が無音となっている場合、あるいは他の受験者の声や周辺の雑音が大きく入り込んでいる場合などは、採点が困難となる。また、試験が途中で停止し、その後においても再録音されないまま終了処理(Complete)が行われた場合には、受験者側では終了したと認識していても、システム上は未完了扱いとなることがある。

本稿では、こうした事例を踏まえ、TOEFL Primary® / TOEFL Junior® Speaking Test を教育機関において安全かつ安定的に団体実施するために必要なハード・ネットワーク環境および教員の運営体制について整理し、実施指針例として提示するものである。

## 2. 団体実施に必要なハード・ネットワーク環境

### (１) 通信特性の理解

TOEFL® Speaking Testでは、問題提示、音声再生、録音、データ送信が短時間で連続的に実行される。特に録音データの送信時には通信が瞬間的に集中するため、一般的な授業利用とは異なる通信特性を持つ。

通常の授業では、YouTubeなどの動画視聴やWebサイトの閲覧、課題提出など、比較的均一な通信が継続的に行われるため、若干の通信のスピード低下が起きても、平均的な通信速度が確保されていれば問題になりにくい。しかし、本試験では受験者全員がほぼ同時に録音データを送信するため、瞬間的な通信集中に耐えられる設計が必要となる。安全設計としての想定は以下の表を参照されたい。

| 項　　目 | タブレット, パソコン１端末あたりの通信速度 |
|---|---|
| 平均通信 | 1～2Mbps程度 |
| 瞬間ピーク | 3～5Mbps程度 |
| 安全設計 | 5Mbps程度 |

実務上は、1端末あたり約5Mbps程度の通信余裕を見込み、40人同時受験の場合には約200Mbps級の安定した通信環境を確保することが望ましい。ただしここで重要なのは、単純な回線速度ではなく、通信が途切れず安定して継続することである。※１教室あたりの人数については後述する。

### （２）通信安定性とその阻害要因

TOEFL Primary® / TOEFL Junior® Speaking 試験においては、通信速度以上に通信の安定性が重要である。特にレイテンシ(遅延)、パケットロス(データ欠損)、通信断は、音声データの欠損や送信失敗の原因となる。

学校現場において通信が不安定になる主な要因として、以下が挙げられる。

①アクセスポイントへの通信負荷
まず、同一アクセスポイントへの接続端末数が多すぎる場合、アクセスポイント内部の処理能力を超過し、通信が順番待ちの状態となる。その結果、接続は維持されているものの応答が遅延し、録音送信のタイミングに影響を与える。

②学校全体のネットワーク利用の影響
次に、他教室でのネットワーク利用の影響である。特に動画視聴やクラウド同期など帯域を大きく消費する通信が同時に行われている場合、音声の送受信を行っている試験の通信の安定性が損なわれる。

③物理的な環境の影響
さらに、Wi-Fiの電波干渉も大きな要因である。学校では複数のアクセスポイントが近接して設置されていることが多く、同一または隣接チャンネルの利用により電波が干渉し、通信品質が低下することがある。
また、端末のローミングによって接続先アクセスポイントが切り替わる際、一時的な通信断が発生することがある。これが録音データ送信中に発生すると、データ欠損の原因となる。(ローミングの問題については試験中に教室や席を移動することがなければそれほどきにする必要はない)
加えて、OSアップデートやクラウド同期などのバックグラウンドでの通信がSpeaking試験の最中に開始された場合、帯域を圧迫する要因となる。

### （３）Wi-Fi環境の設計

Wi-Fi環境については、試験用途として以下の構成が望ましい。
・Wi-Fi6以上のアクセスポイントの使用
・教室単位での専用アクセスポイントの配置
・5GHz帯の優先利用
(特に周波数帯については、2.4GHz帯よりも5GHz帯の利用が望ましい。2.4GHz帯は多く

の電子機器と干渉しやすく、安定性に課題がある。一方で5GHz帯はチャンネル数が多く干渉が少ないため、同時通信が発生する試験環境に適している。ただし、5GHz帯は障害物に弱く、電波の到達距離が短いという特性があるため、アクセスポイントの設置位置と電波状況の確認が不可欠である。）

### （4）廊下設置アクセスポイントの留意点

廊下設置型アクセスポイントの場合、教室内では壁や扉を介して電波が減衰する。そのため、アクセスポイントと反対側に位置する教室の隅の座席では通信が不安定になる傾向がある。したがって、当該座席の使用は可能な限り避けることが望ましい。

また、試験前には実際の座席位置において通信確認を行い、「接続できるか」ではなく「安定して通信できるか」を確認する必要がある。

具体的には、

●教室の前後左右で接続テストを行う
●実際の端末を用いて通信状況を確認する
●同時接続状態での動作確認を行う

といった検証を行う必要がある。

### （5）座席配置と音声環境

Speaking Testでは、他の受験者の音声が録音に混入することが採点に影響する可能性がある。また、タブレットやPC端末密集による端末同士の電波干渉も考慮する必要がある。そのため、受験者の座席は一列おきに配置することが望ましい。この配置により、音声混線の防止と通信安定性の向上の両方を実現することができる。

### （6）端末および機材

端末についてはETS(Educational Testing Service：世界最大規模の非営利テスト開発・研究機関。TOEFL®を開発・運営。以下「ETS」という。)が動作保証する環境を使用する必要があり、Chromebookは本試験に対応していない。

また、音声機材については有線ヘッドセット(USB-Cタイプまたはピンプラグタイプ)の使用を原則とする。Bluetooth機器はバッテリー消耗や接続不安定のリスクがあり、試験用途には適さない。

## 3. 団体運営および教員のICTスキル —TOEFL® Speaking Testを成立させるための運営実務—

### （1）試験監督の役割は「ICT運営者」である

TOEFL Primary®/TOEFL Junior® Speaking Testにおける試験監督は、従来の紙試験とは本質的に役割が異なる。ペーパー試験においては、不正防止や時間管理が主な役割であったが、本試験ではそれに加えて、端末・ネットワーク・音声環境を統合的に管理する「ICT運営者」としての役割が求められる。

特にSpeaking Testでは、受験者の回答がすべて音声データとして記録・送信されるため、「問題が正しく表示されているか」以上に、「音声が正しく録音され、正常に送信されているか」が試験成立の条件となる。つまり、監督者は単に試験を見守る存在ではなく、「試験が成立しているかどうかを技術的に確認する責任者」である。

この認識が不足している場合、受験者本人が気づかないまま録音不備や通信不良が発生し、その結果としてNS(No Score)が発生するリスクが高まる。

### (2) 教員に求められるICTスキルの実態

本試験を安定的に実施するためには、教員は最低限のICT操作能力に加えて、「異常を見抜く力」と「即時判断力」を持つ必要がある。

まず基本的なスキルとして、Wi-Fi接続の確認、マイク入力の設定確認、音量調整、ブラウザの動作確認、端末の再起動といった操作は確実に行える必要がある。これらは単なる操作スキルに見えるが、実際には試験の成否に直結する重要な要素である。例えば、マイクのプラグの入力先が誤っている場合、受験者がどれだけ話しても音声は記録されず、そのまま提出されればNSとなる可能性がある。

さらに重要なのは、ネットワークに関する理解である。試験中に「遅い」「固まる」といった現象が発生した場合、それが一時的な遅延なのか、通信断に近い危険な状態なのかを判断しなければならない。単に「様子を見る」のではなく、「この状態は継続可能か、それとも再対応が必要か」を判断する能力が求められる。

音声に関しても同様である。録音後に再生して確認した際、音量が小さい場合、それが許容範囲か、それとも採点不能レベルなのかを判断する必要がある。背景ノイズについても、「多少の雑音」であれば問題ないが、「他の受験者の声が明確に聞こえる」場合は重大な問題となる可能性がある。このような判断は、事前に基準を共有していなければ現場で迷いが生じる。

### (3) 試験前準備の質が結果を左右する

団体実施において最も重要なのは、実は試験当日ではなく「試験前の準備段階」である。多くのトラブルは事前確認で防ぐことが可能であり、準備の精度がそのまま試験の安定性に直結する。まず、すべての端末に対して動作確認を行う必要がある。これは単に電源が入るかどうかではなく、実際に試験環境で問題が動作するか、音声が録音されるか、再生できるかまで確認することを意味する。特に重要なのは「録音して再生する」という一連の流れを受験者自身に体験させることである。この工程を省略すると、試験中に初めて不具合が発覚するリスクが高い。

また、ネットワーク接続についても、「接続できているか」ではなく「安定して通信できているか」を確認する必要がある。全員同時接続の状態で問題が発生しないかを事前に検証することが望ましい。さらに、ヘッドセットの状態確認も不可欠である。有線接続であっても接触不良や断線が起こる可能性があり、個別に確認しなければ試験中のトラブルにつながる。

これらのトラブルを避けるため、また予行練習として事前の授業などでサンプル問題に取り組み、タブレットやヘッドセットの扱い方やネットワークへの接続が安定しているかどうかを確認しておくことを勧める。

### (4) 教室内の座席配置と人数

Speaking Testでは、ネットワークだけでなく音声環境も重要である。

特に以下の2つの問題が同時に発生する可能性がある。

・Wi-Fiの干渉(端末密集による通信品質低下)

・マイクの音声混線(他者の声の録音)

これを防ぐために、受験者の座席は一列おきに配置することが望ましい。この配置により、端末間の物理的距離が確保され、

・電波干渉が緩和される

・他の受験者の声がマイクに入りにくくなる

・試験監督が個別の状況を把握しやすくなる

といった効果がある。

特にSpeaking Testでは、他者の音声が録音に入ると採点不能となる可能性があるため、有効である。

1教室あたりの人数については、20名程度が望ましい。メリットとデメリットは以下の通りである。

＜40名のクラスでSpeaking Testを実施する場合(例)＞

20人＋20人の2教室分散、または、20人ずつ時間帯を分けて実施する

→ ネットワーク負荷と音声環境を安定させるための最も現実的な方法。

(メリット)

・音漏れ低減に効果的

→ Speakingでは他者の声がノイズになるため、人数を分けることで改善される。

・トラブル対応がしやすい

→ 少人数の方が監督個別対応しやすい。

(デメリット)

・監督数が2倍必要または監督時間が2倍になる

→ 教室が増えるため人員コストが増える点に注意。

→2回に分けて行う場合は、時間が2倍になる。

## 4. 試験当日の運営と時間管理

試験当日は、一定の流れに基づいて運営することで安定性を高めることができる。

試験開始30分前には、端末配布と接続確認を完了させる。この段階では、全員がWi-Fiに接続できているか、ヘッドセットが正しく認識されているかを確認する。

15分前には、最終的な音声確認を行う。ここでは実際に話し、録音し、それを再生して確認する。このプロセスを全員に実施させることで、「録音できていない」という致命的な問題を事前に排除する。

試験中は、教室内の静音環境を維持しながら、受験者の様子を観察する。特に、操作が止まっている受験者や、明らかに困っている様子の受験者には迅速に対応する必要がある。ただし、不必要な声かけや移動は他の受験者の録音に影響を与えるため、慎重な対応が求められる。

## 5. 試験中に求められる判断力

試験中の最大のポイントは、「どのトラブルをどのレベルで対応するか」という判断である。例えば、軽微な通信遅延や一時的な画面停止は、そのまま復帰する可能性があるため、即時中断する必要はない。しかし、録音が明らかにされていない、音声が全く聞こえない、画面が進まないといった場合は、そのまま継続すると試験全体が無効になる可能性がある。

また、音声が小さい場合でも、完全に無音でなければ採点可能なケースもあるため、「即中断」ではなく「状況判断」が必要になる。この判断を現場で迷わないためには、事前に具体的な判断基準を共有しておくことが重要である。

受験者が使用している機器に不具合が生じた場合の対応のために、学校で受験者数に応じて予備の機器を準備しておくと万全の体制が取れる。

## 6. 試験終了確認の重要性

本試験において最も見落とされやすく、かつ重大な問題が「試験終了の確認」である。実際の事例では、学校側は試験が終了したと認識していたにもかかわらず、ETS側では「一時停止後に再開されていない」と判定され、試験が未完了扱いとなったケースが報告されている。

このような事態を防ぐためには、「受験者が終了したと思っている状態」ではなく、「システム上完全に終了している状態」を確認する必要がある。具体的には、Complete表示の確認、データ送信の完了、試験画面の正常終了を監督者が目視で確認することが求められる。

この工程を省略すると、受験者全体の努力が無効になるリスクがあるため、試験運営の最終工程として最も重要な作業の一つである。

## 7. 教員研修の必要性

これらの運営を現場で確実に実行するためには、教員に対する事前研修が不可欠である。特に、模擬試験の体験は非常に効果的であり、実際に受験者の立場で試験を体験することで、どの部分でトラブルが発生しやすいかを理解できる。

また、NSの具体事例を共有することで、「どのような状態が危険か」を具体的にイメージできるようになる。さらに、トラブル発生時の対応訓練を行うことで、実際の試験時に冷静に対応できる体制を整えることができる。

## 8. まとめ

TOEFL® Speaking Testの団体実施においては、教員は単なる試験監督ではなく、「ICT環境の管理者」としての役割を担う必要がある。試験の成否は、個々の受験者の能力だけでなく、環境と運営の質に大きく依存する。

そのため、事前準備、試験中の判断、試験後の確認までを一貫して管理できる体制を構築することが、安定した試験実施の鍵となる。特に「試験が正しく終了したか」を確認することを監督者は意識しておくことが大切である。

# Part２：オーセンティックな統合型テストTOEFL Primary® Speakingを団体実施する為に必要な授業デザインについて（文責：中村　直紀）

## 1. はじめに

長年英語教育に携わってきた中で(ECC外語学院にて約20年間、学校で約16年間)、幼児から大人までの幅広い年齢層への英語指導を通じて、様々な角度から日本の英語教育の変革を体感してきた。一例として、2020年度より文科省からの指針である「グローバル化に対応した英語教育改革」、「学習指導要領の改訂」が始まり、大学入試共通テストではセンター試験で問われてきた英語力とは全く異なった「英語での思考力・判断力」を測るようになり、「どれだけ覚えたか(到達度)」から「どれだけの実践力があるのか(熟達度)」が問われるようになった。この変革は一例であるが、改めてECC時代から私が進めてきたこの両面を意識した指導が正しかったと感じている。

この改革の当初はセンター試験の代替として各種英語資格試験を導入する予定で進んでいたが、それが中止になったことで再度教えている子ども達の英語力をどのような指標で測るべきなのかを自分自身で主な英語資格試験を受験して判断することにした。この中止は再度行うべき英語教育を見直す貴重なきっかけになり、子ども達の英語能力を「到達度」という観点と「熟達度」という観点から測っていくことが最も効果的であると感じた。そこで現在、私が指導している小学校ではこの両面から、到達度は実用英語技能検定(希望者)で測り、ListeningとReadingの熟達度は世界中の同世代の子ども達が受験しているTOEFL Primary®/TOEFL Junior®(全員受験)で測っている。また、Primaryでスコアの上位者(220点以上を目安)にはSpeaking Testを受ける機会も設け、グローバル基準でSpeaking力を測る環境も整えている。

今回は私が教えている小学校高学年を中心に、一条校としてどのような英語教育をどのような授業デザインで展開しているのか、またどのような指標を用いて子ども達のパフォーマンスを評価しているのかを述べさせていただき、それが今後の教育活動の参考になれば幸いである。

## 2. 一条校としての実践

### 2.1 英語教育概要

一条校として現在実践している英語教育は、「将来役立つCommunication力＋中学に向けての準備」の指導を目的に行っており、以下が主な概要である。

①授業時間数は1年生から6年生まで週3時間、卒業時までに中学2年次までに学習する内容は網羅するようにしている。

②教員は専科バイリンガルが2名、Nativeが2名という指導体制で、低学年での知覚学習から高学年での概念学習へと自然に移行するプログラムにしている。

③使用教材はOxford University Pressとカリキュラムを協同作成し、1年生から4年生は「Everybody Up L1～L4」、「Awesome Phonics Adventure 1～3」、5、6年生は「Get Ahead 1」、「キクタン」を使用している。英語を英語で教えるDirect Method(直接指導法)で授業を進めており、1年生から4年生までは文字と音をリンクさせながら正しい発音を習得し、そこから表現を学び、Projectを通じてプレゼン能力を付けていくという流れで指導し、5年生以上は4年生までの流れを更に応用し、概念的な学習を入れ、習った単語、文法、構文がどのように会話の中で使われているのかを最終的に自分達で作った対話をSkitとしてUnitごとに発表している。

④英語資格試験受験は、「到達度」を測るために英検®準会場として5級から3級まで希望者受験、「熟達度」を測るために世界中の同年代の子ども達と比較し、コミュニケーション実践能力がどれだけ付いてきたのかをグローバルスタンダードで測ることのできるTOEFL Primary®/TOEFL Junior®を3年生から6年生まで全員受験、1、2年生は希望者受験で実施している。また、Primaryでスコアの上位者(220点以上を目安)にはSpeaking Testを受ける機会も設けている。

**＜TOEFL Primary® Speaking Test受験の様子＞**





## 2.2 その他のポイント

上記の概要以外に整えてきたものや、授業にあたっての留意点をいくつか紹介したいと思う。

①MetaMetrics Lexile® & Quantile® Official Educatorとして図書館内に英語コーナーを設け、TOEFL Primary®/TOEFL Junior®の受験によって測られるLexile®指数に応じてレベル分けがされているLexile® Collectionを揃えており、自分のレベルに合わせた本を読むことで子ども達のReading力を自然に伸ばす環境を整えている。

②e-bookは10年以上活用し、2025年度は文部科学省「AIの活用による英語教育強化事業」AI英語活用リーダーとしてAI Chatを授業デザインの中に入れており、それ以降は「動(活動的な時間)と「静(整理する時間)」がはっきりとした授業を展開している。

③特に小学校においての英語教育は「英語学習が好き」かどうかは将来に向けて大切な指標になっているので、全国学力度調査や毎学期に実施する授業フィードバックシートの活用を重要視している。

④最終的に授業内でInput → Output → AI Chatというデザインで進めた後、サバイバルな環境の中でどこまで自分のコミュニケーション力が付いたのかを世界126ヶ国のTutorと話すことのできるDMMオンライン英会話にて体感する機会を設けている。

⑤授業の環境はPBS(Positive Behavior Support)とHLT(Humanistic Language Teaching)をベースにStudent-centeredな授業を心がけており、間違うことは当然のことであり、それよりも自信を持って発話、発表していくという流れを作っている。

**＜Lexile® Collectionを揃えた図書館の様子＞**



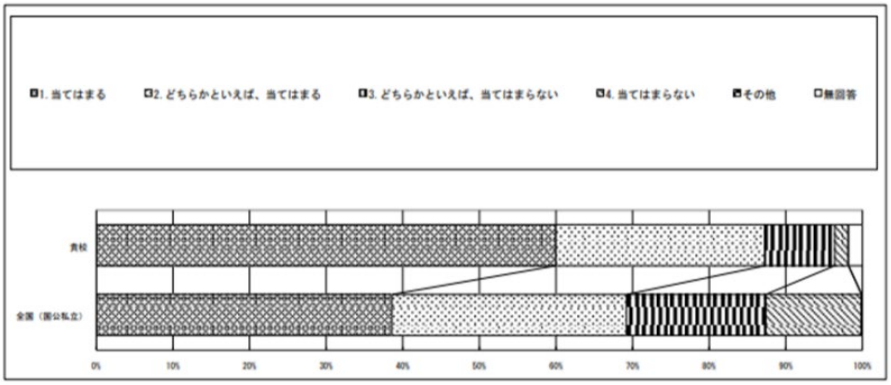



**＜DMM英会話受講の様子＞**



**＜全国学力・学習調査アンケート結果より＞**

| 質問番号 | 質問事項 | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （５５） | 英語の勉強は好きですか | | | | | | | | | | |
| 選択肢 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | その他 | 無回答 |
| 貴校 | 60.0 | 27.3 | 9.1 | 1.8 | | | | | | 0.0 | 1.8 |
| 全国（国公私立） | 38.6 | 30.6 | 18.2 | 12.5 | | | | | | 0.0 | 0.1 |




**→毎年約90%の児童が「英語の勉強が好き」と答えている。**

## 2.3 授業デザイン

指導法はアリゾナ州立大学留学時やECC時代に研修やレッスンの中で養われたもので、毎回の進め方はパターン化されており、子ども達だけでOutputの練習ができるように指導しているのでそのデザインを述べていきたいと思う。

①Input：Output：AI Chat：Survival＝2：6：1：1、教師の発話量：子ども達の発話量＝2：8、教師の授業内での日本語使用量：英語使用量＝2：8で進めているが、Inputではそれぞれの Unitに出てくるターゲットとなる単語、文法、構文を説明し、これらの単語や文法をどのように会話の中で使っていくのかをOutputで実践していく。子ども達は場面状況に応じた実践的な表現をたくさん覚えていくが、やはり即答できるかどうかというサバイバル的な状況は必要だと考えている。ホームステイや留学をするとそれが一番体感できるが、それ以外にも様々な国のTutorと実践的な会話を学習できるDMM英会話を希望者が受験できる環境を整えている。様々な国のTutorが話す英語、そしてその国の文化や情報も学ぶことができるので、探究学習にも繋がり、更なる英語学習のモティベーションに繋がっている。

②4技能の指導Methodは、Listening → Understanding(Input) → Reading Practice → Check → Memorization → Check → Making Conversations(Writing) → Reading Practice → Check → Memorization → Check(Skit) →AI Chat → Survival → Workbook(Writing)という流れで行っている。この流れをChorus Reading、Self-Practice、Pair Practiceなどを融合させながら練習し、最終的に習った単語、文法、構文を用いて、様々な場面、状況に合わせたSkitを発表する機会を設けている。

**＜Oxford University Pressと協同で開発した授業の様子＞**





## 2.4 評価

評価に関しては、特に小学校における英語能力は個々の子ども達のバックグラウンドや生活環境によって変わってくるので、モティベーションが下がらないよう慎重に評価している。

①主体的に学習に取り組む態度－特に小学校における主体的評価は教師側からのアプローチで大きく変わると言える。中には英語学習に関して苦手意識を持った子どもも当然いるが、「積極的に参加できる授業」をこちらから展開していけば、この評価は自ずと高くなる。結局はこの主体的評価は教師の授業力の評価であると言える。

②思考・判断・表現－この部分に関しては、Outputを重要視し、従来の減点方式でストレスを与えながら評価するやり方ではなく、自分は何がどこまでできるようになったのかを把握させ、Unitごとにペアで Skitを行い、加点して評価するようにしている。

＜スキット評価ポイント(各項目は5点満点)＞

Memorization/ Volume of voice/ Pronunciation・Accent・Intonation/ Facial expression・Gesture・Eye contact/ Imaginationの5項目を評価するが、個々のバックグラウンドや生活環境によって変わってくる要素もあるので、頑張りや協力姿勢を評価することが大切になってくる。

③知識・技能－この部分に関しては、特に小学校における英語能力は個々の子ども達のバックグラウンドや生活環境によって変わってくるので、慎重に評価している。そして、最も自分の授業内容、方法が反映される部分だと感じる。そのためには英語資格試験の活用が必要不可欠であり、国際基準であるCEFRを基準として、3年生以上はTOEFL Primary®/TOEFL Junior®で成果を測っている。

## 2.5 結果

大学入試が最終のゴールではなく、今後グローバル化している世の中で子ども達が活躍できるための基盤を作っていくことを目標としているが、学習指導要領に沿ってどれだけ覚えたかという「到達度」は、日本においては受験等では必要不可欠な実用英語技能検定(希望者)で測り、熟達度は世界中の同世代の子ども達が受験しているTOEFL Primary®/TOEFL Junior®(全員受験)で測っている。TOEFL Primary®/TOEFL Junior®は、今後実生活で求められる英語での必要な情報のみを読み取る力、思考力・判断力、場面や目的に応じた聞き取りを要する実践的な英語力を測ることができるので、私自身の授業の在り方に関しても測ることができると感じている。また、Primaryでスコアの上位者(220点以上を目安)にはSpeaking Testを受ける機会も設け、Speaking力もグローバルスタンダードで測ることのできる環境を整えている。

**★「到達度」(希望者受験)と「熟達度」(全員受験)の結果(一例)**
**・英検®取得の現状に関して(高学年の級ごと取得者数)**
**＜2023/2/27付＞**

| 取得級 / 学年 | 5級 | 4級 | 3級 | 準2級 | 2級 | 準1級 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5年(55名) | 12名 | 13名 | 13名 | 8名 | 2名 | |
| 6年(64名) | 11名 | 13名 | 12名 | 13名 | 5名 | 1名 |

**※英検®はあくまでも合否で見ているので人数で示している。**

**・TOEFL®(Reading/Listening)のCEFR割合に関して(2022年度と2023年度の比較)**
**＜2022年度＞5年(受験者53名)**

| level / part | below A1 | A1 | A2 | B1 |
|---|---|---|---|---|
| Reading | 9% | 60% | 31% | |
| Listening | 9% | 41% | 46% | 4% |

**↓　↓ 1年でbelow A1の割合が減り90%の児童がA1 Level以上で卒業**

**＜2023年度＞6年(受験者54名)**

| level / part | below A1 | A1 | A2 | B1 |
|---|---|---|---|---|
| Reading | 2% | 59% | 35% | 4% |
| Listening | 2% | 46% | 46% | 6% |

英検®に関しては、準会場として5級から3級までを受験できるように設定し、年3回受験する機会を設けており、各レベルに到達した時点で受験できるように希望者対象に受験している。一方、グローバルな指標で測ることのできるTOEFL Primary®/TOEFL Junior®では、毎年Below A1を減らすことを目標としており、卒業時には90％以上の児童がA1レベル以上で卒業していくので、Outputを中心とした授業の指標として全員が受験し、正確な結果が出ている。

**・TOEFL®(Speaking)のCEFR割合に関して(2022年～2025年　受験者77名)**

| level / part | below A1 | A1 | A2 | B1 |
|---|---|---|---|---|
| Speaking | 2% | 22% | 52% | 24% |

Speaking TestはPrimaryでスコアの上位者(220点以上を目安)に受験を進めているが、結果を見るとやはりサバイバルな会話能力だけでなく、Logical(論理的)に説明できる力がある児童が対応できている。ここでSpeaking Testの内容を紹介していくが、自校での指導法、子ども達の能力と照らし合わせていただければ幸いである。

# 3. TOEFL Primary® Speaking Testについて

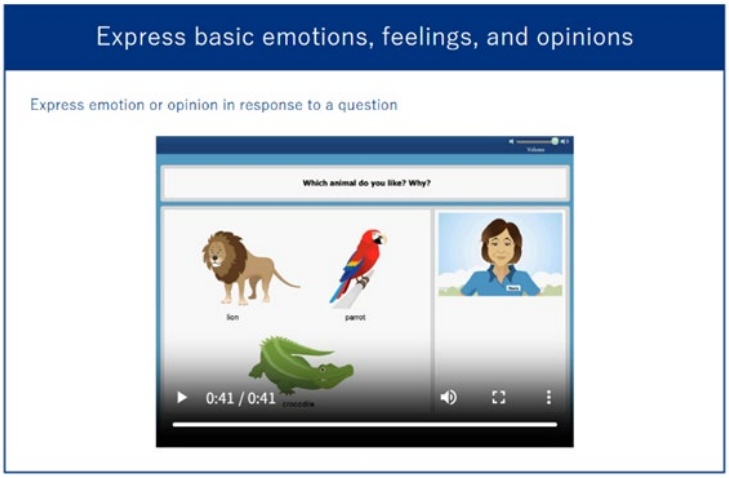
### 3.1 TOEFL Primary® Speaking Testフレーム

| | |
|---|---|
| 対象 | 世界65ヶ国以上の国で実施されている英語を母国語としない小中学生 |
| 目安レベル(CEFR) | CEFR A1 ～ B2 |
| 問題構成 | CBT(Computer Based Testing)…パソコン・タブレットを使用してテスト問題が出題され、受験者はヘッドセットを装着して音声を聞き、解答を録音します。 8問　約20分 |
| 測られる能力 | アメリカのETS(Educational Testing Service)が英語を母国語としない世界中の小学生・中学生対象に開発した英語のコミュニケーション能力を測るテスト。<br><br>テストでは、受験者自身への基本的な質問に答えたり、簡単なイラストを見て自分の考えを述べたりします。英語を用いた日常のコミュニケーションに困らないレベルから、英語母語話者との議論でも流暢に通じる英語力までを測ることができます。<br><br>Part1 Express basic emotions, feelings, and opinions<br>Part2 Give directions<br>Part3 Give simple descriptions<br>Part4 Explain and sequence simple events<br>Part5 Make simple requests<br>Part6 Ask questions(3問) |
| スコア換算方法 | スコア範囲　0～27<br>スコアレベル　CEFR A1未満～B2<br>リボン数　1～5<br>採点　ETS公認の複数のRater(採点者)により評価 |

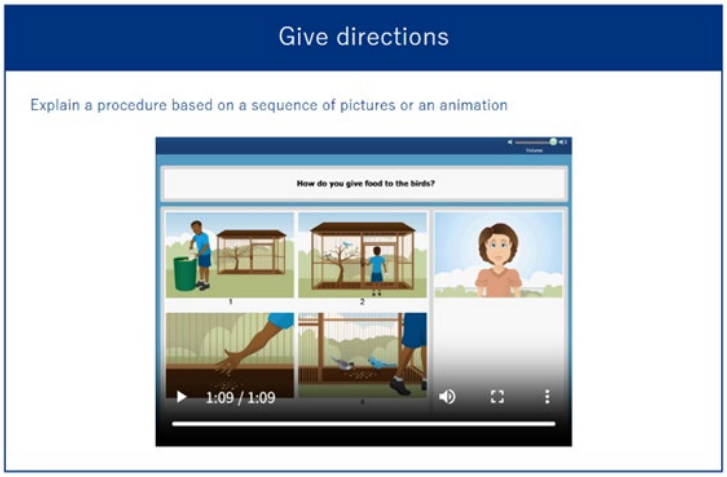
### 3.2 TOEFL Primary® Speaking問題(例)―GC＆T公式HPより抜粋

日本のテストのような方法ではなく、あるテーマに沿ってSpeaking Testはタブレット上で展開されていく。こちらのサンプル問題では、動物園を舞台にしたストーリーに沿って、問題が続いていく。ストーリー性があるので一連の流れの中でSpeaking力を測ることができ、日本で実施されている会話力を測るテストとは全く異なったアプローチ方法である。また、対策をして合格に導くというようなテストではなく、自分自身の授業デザインがダイレクトに反映するテストであり、問われる能力を以下のサンプル問題を通じて確認いただきたい。

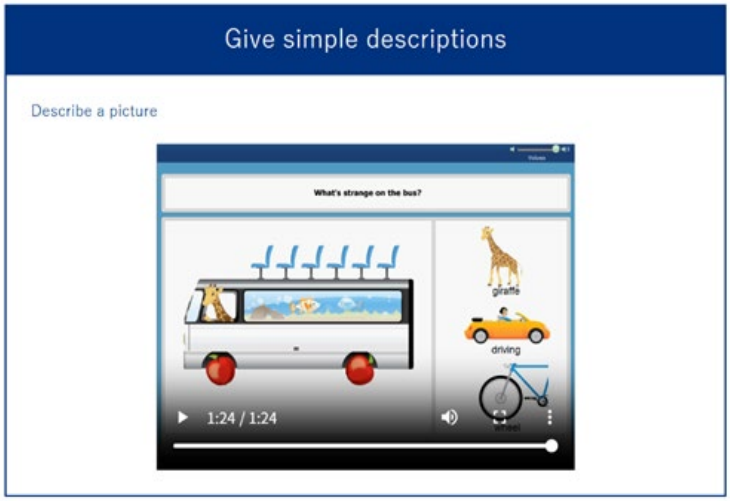
〇Part1－Express basic emotions, feelings, and opinions－ある質問に対して自分の気持ち、考えや意見を伝えることができるかどうかが問われている。短文ではなく理由を明確に述べていく能力が問われる。このサンプルでは好きな動物を言えて、その理由を述べていく。



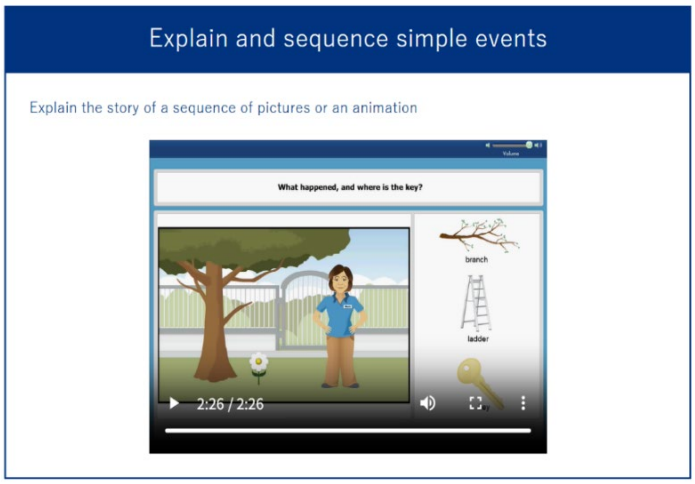

〇Part2－Give directions－絵やアニメーションの内容を順序立てて説明できるかどうかが問われている。ここでは一つの事象が段階を追って展開されているので、それを説明できる論理的な表現力が問われる。このサンプルでは鳥に餌を与えるまでのストーリーの説明をしていく。



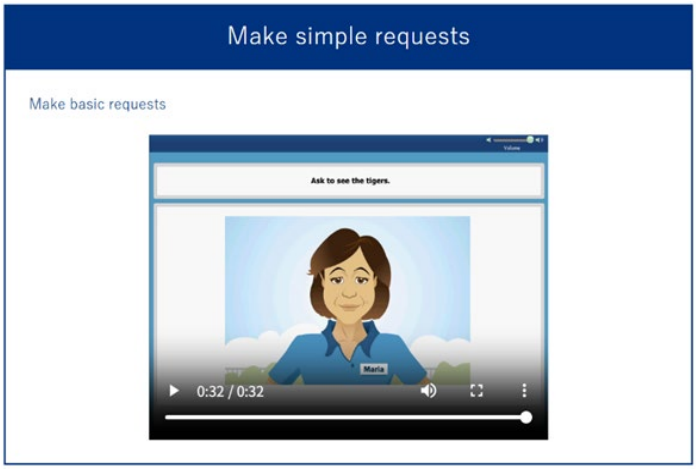

〇Part3－Give simple descriptions－絵を見て、それに対しての説明をすることができるかどうかが問われている。ここではおかしな箇所を見つけ出し、それに対しての描写をしていく力が問われる。このサンプルではバスを見て、おかしな個所を述べていく。



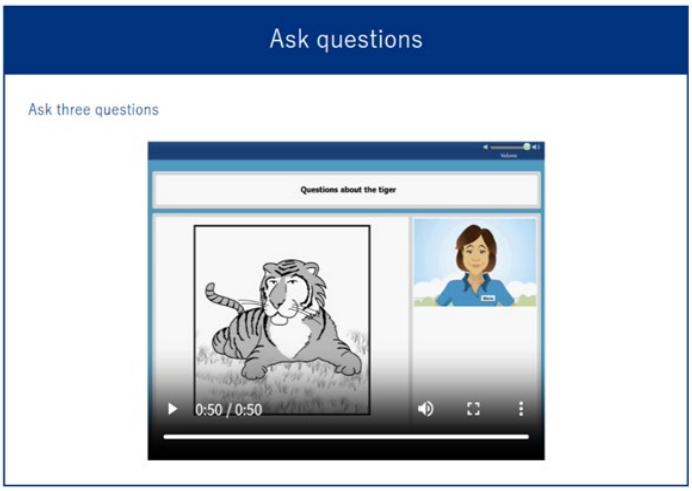
〇Part4－出来事を順序立てて説明できるかどうかが問われている。人に対しての説明なのでシンプルな英語で段階を追って説明できるという表現力が求められる。ここではサルがカギを隠すまでの流れを説明していく。




〇Part5－簡単な依頼をすることができるかが問われている。ここは短文で聞くだけでよいので対応はしやすいと思われる。ここではトラを見てもよいかを尋ねる。




〇Part6－ストーリーに沿った質問を複数できるかが問われている。短文3つの質問でよいので、対応はしやすいと思われる。ここでは白黒で描かれているトラに関しての質問をしていく。

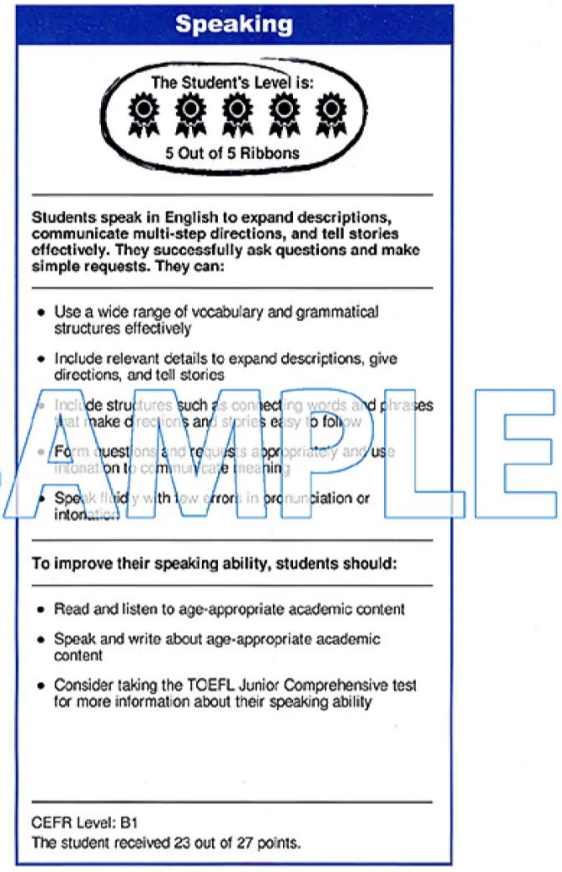


### 3.3 テスト結果の内容について

TOEFL Primary® Speaking の結果は、合否判定ではなく、スコアで表される。ETSからオフィシャルスコアレポートが発行され、スコアやCEFRレベルが英語で表記されており、スコアレポートは、国内外での各種出願時に受験者の英語力を証明する公的資料として利用が可能である。

ETS推奨スコア有効期限は、テスト受験日(Test Date)から1年間とされており、TOEFL Primary® Speaking の5リボンを取得したら、ETS発行の賞状を授与することが可能である。

また、日本語でのスコアガイドも付いてくるので、内容を理解しやすくなっている。

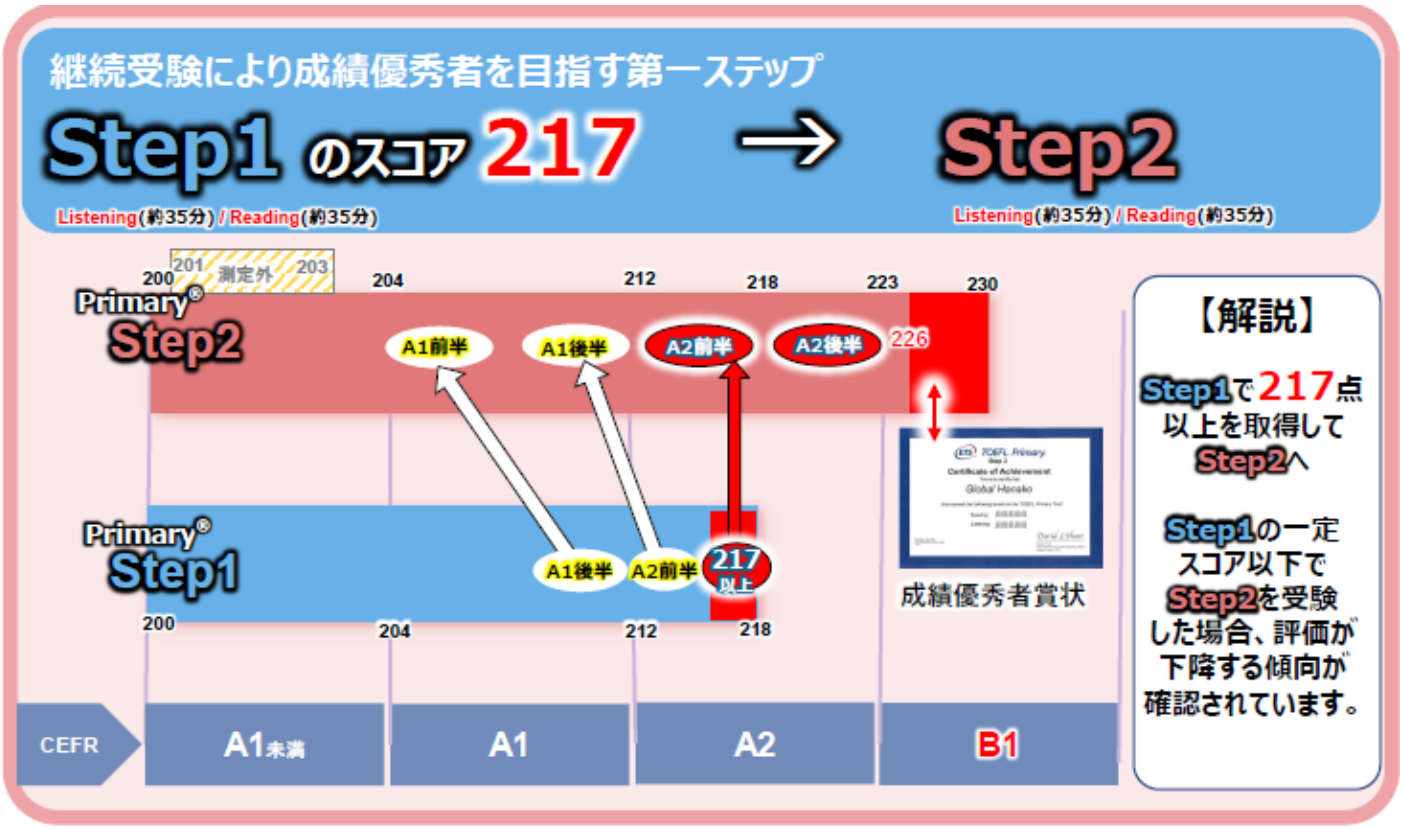




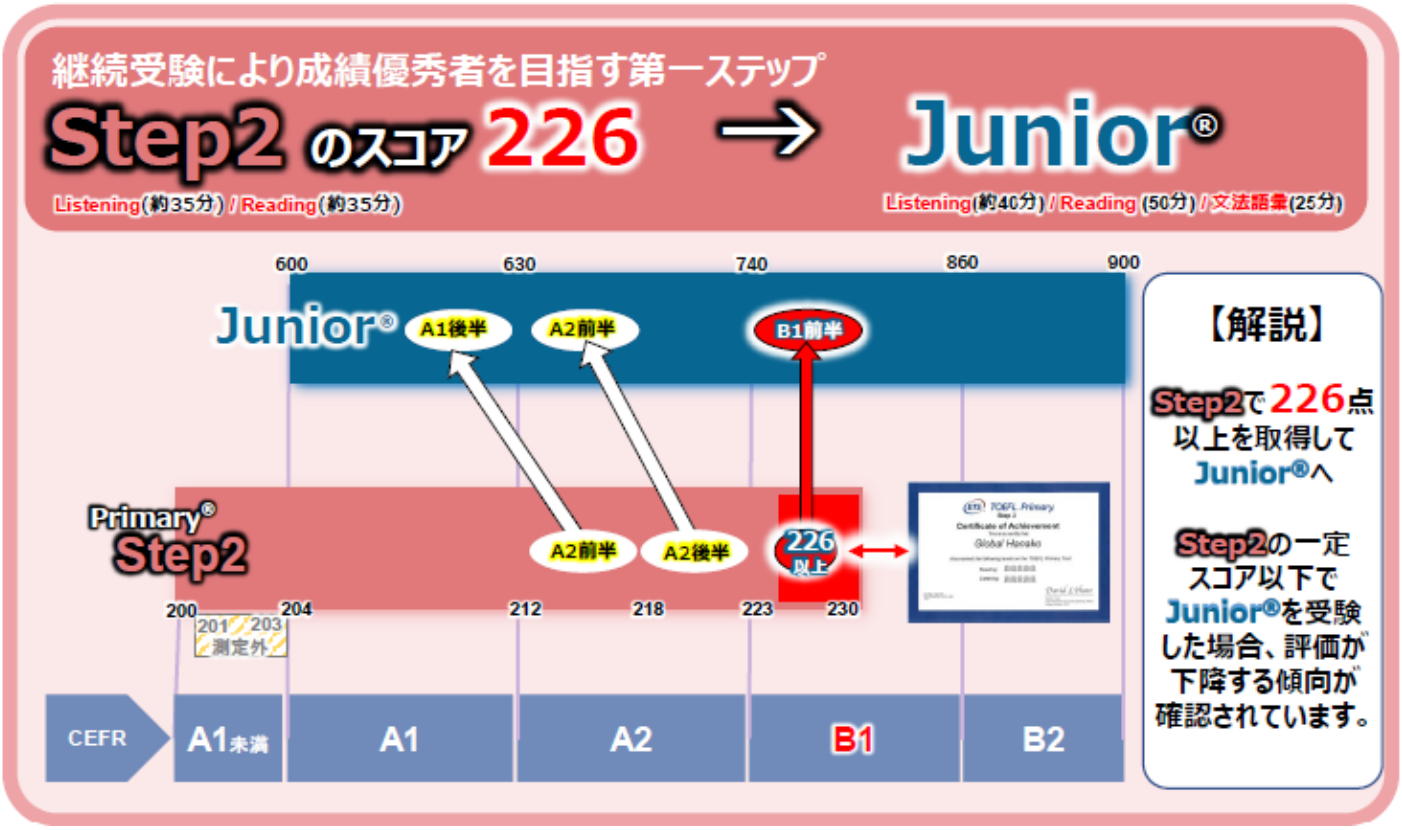

### 3.4 受験するタイミング～実施負担と費用面も含め考慮して～

受験者の英語力や学習進度に沿って、また、試験実施に伴う学校側の準備・運営負担や受験費用も考慮し、無理なく継続できる受験ステップを検討する。

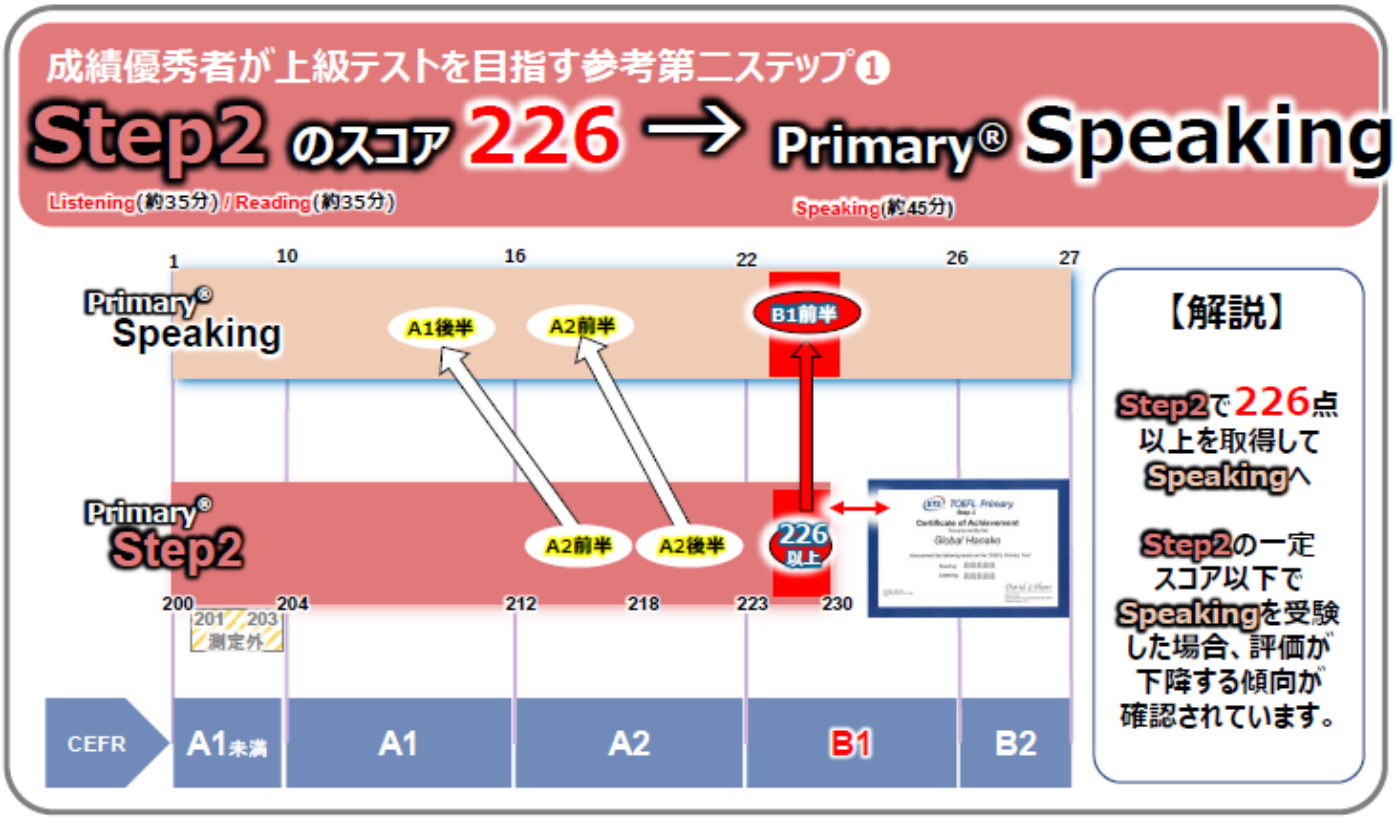
**TOEFL Primary® Step 1からStep 2への検討：成績優秀者を目指す第一ステップ**



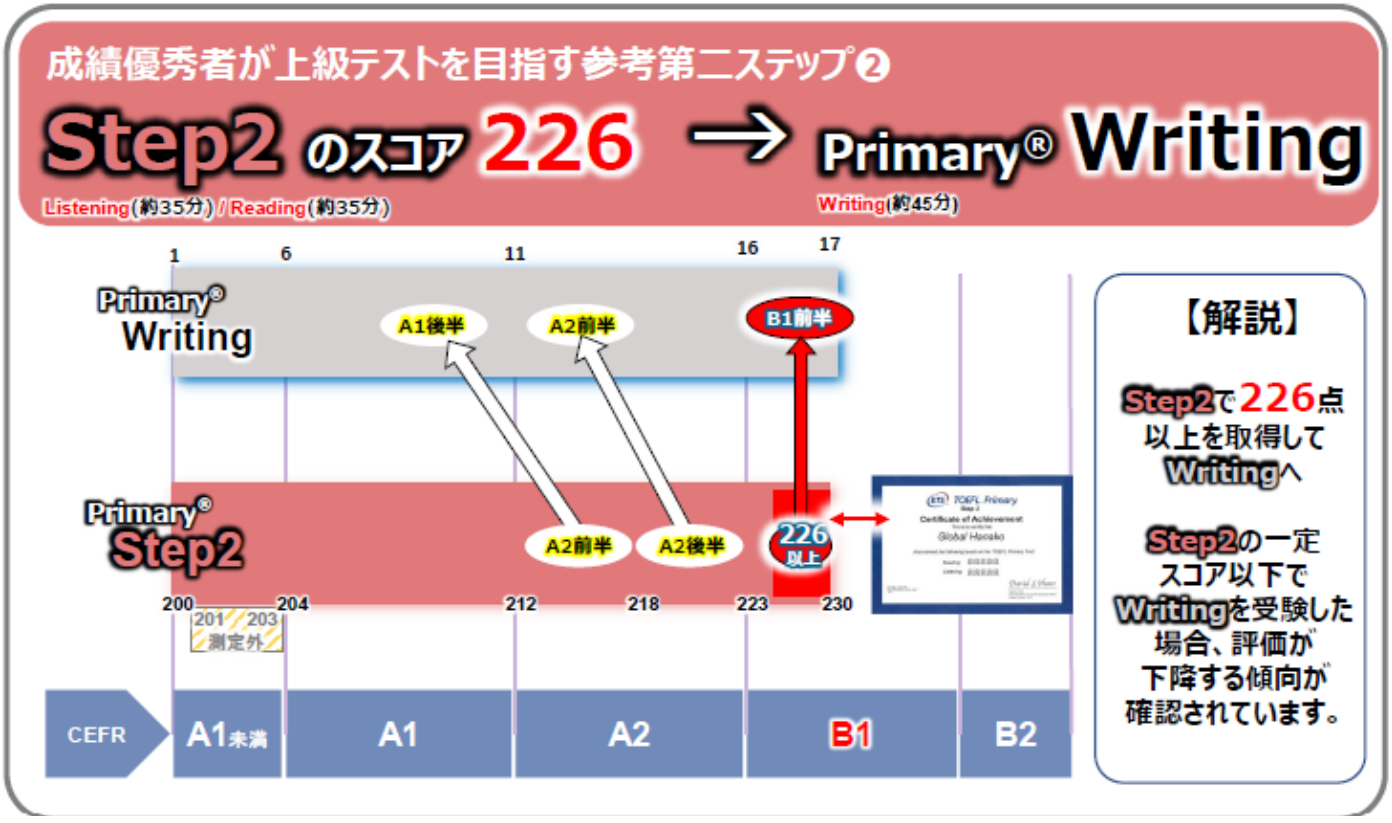

**TOEFL Primary® Step 2 からTOEFL Junior®への検討：成績優秀者を目指す第一ステップ**



TOEFL Primary® Step 2から Primary Speakingへの検討：成績優秀者が上級テストを目指す参考第二ステップ❶




TOEFL Primary® Step 2から Primary Writingへの検討：成績優秀者が上級テストを目指す参考第二ステップ❷



# 最後に

今回は現在進めている英語教育のデザインとその指標、成果についてまとめたが、たくさんの人々と協力して作り上げている。日本全体の英語力は諸外国と比較するとまだまだ低いが、この英語力というのは「英語を使えるかどうか」という指標なので、今後我々が指導法を変えていくことで大きく結果が左右していくと推測できる。特にSpeaking Testをグローバル基準で測っていくことで指導の進め方も大きく変わってくるので、今後さらにその必要性が増してくると感じている。

また、全国よりたくさんの先生方、教育機関の皆様が授業見学に来られており、授業のフィードバックやお互いの授業に関しての話をする機会は本当に貴重である。今後は特にAIの活用が大きなトピックになっており、どのように授業内外で活用していくのかをさらに検証していきたいと思う。授業デザインに正しい、間違っている答えはないが、子どもたちの能力がどのように身についているのかを検証し続けることは英語教員としての使命であると考える。

そして文部科学省の掲げる施策から日本全体として進めていくべき英語教育は見て取れるが、それを現場で実践できているかを再度見直していく必要がある。それは公立私立関係なく子ども達の将来に役立つ英語教育でなければならない。子ども達の未来のために…

## 著者紹介

# 反田　任

■ 所属：賢明学院小学校 英語科教諭

■ 主な経歴・活動：元同志社中学校・高等学校 英語科教諭（2010年4月より現校名）。現在は、学校法人同志社・同志社一貫教育探求センターにて、科学技術振興機構採択プログラム「同志社ジュニア・クリエイティブ科学アカデミー」のコーディネーターを務める。同志社大学文学部嘱託講師として教職課程科目も担当。

■ 専門分野・研究実績：ICTを活用した英語教育、教育DX、AI活用、STEAM教育、主体的・協働的な学びを専門とする。日本私学教育研究所の委託研究員を4回務めたほか、文部科学省の教育ICT関連事業や経済産業省「未来の教室」の教材開発にも携わる。

■ 主な役職・委員等：

NTT ExCパートナー「教育の情報化に関する有識者」、青森県風間浦村「教育DXアドバイザー」、元・文部科学省「ICTを活用した教育推進自治体応援事業」企画・評価ワーキンググループ委員

■ 主な論文・研究発表：

「中学校におけるSTEM教育の実践と評価」（2022年）

「学校教育におけるAI活用の可能性―語学力向上のためのICT活用と自律的な学び」（2021年）

「AI発音チェックアプリ“ELSA Speak”を活用した英語授業デザインの一考察」（2023年発表）

■ 主な資格・認定：

Apple Distinguished Educator Class of 2015

Apple Professional Learning Specialist

Adobe Creative Educator Innovator 2025–2026

# 中村 直紀

■所属: 賢明学院小学校 英語科主任

■活動:「熟達度」と「到達度」を指標としたカリキュラム作成と実践(週約20コマ)

Oxford大学出版局全国セミナー講師

■学歴: 関西外国語大学卒業、アリゾナ州立大学留学(Communication学専攻)

■経歴: ECC外語学院にて英語講師、学校責任者、エリアマネージャーを経て、近畿・関東管区運営責任者

■研究: COLTを用いた専科教員による小学校外国語授業の分析　(北海道教育大学志村昭暢教授・北星学園大学白鳥金吾準教授と共同研究)

■その他経歴:

元GTEC英語教育指導アドバイザー、Club & Radio DJ(大阪と京都にて英語で活動)

2025年度文部科学省「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業(AIの活用による英語教育強化事業)」のAI英語活用リーダーに就任、メタメトリックス社公認レクサイルエデュケーター、ECC AI英語アプリ活用アドバイザー


GEET
一般社団法人
国際教育英語試験協会
Global Educational English Testing